

近代日本における優生学の形成と雑誌『人性』

中 澤 務

1. 日本優生学の形成期における『人性』の役割

明治維新にはじまる西洋文明との出会いは、日本人に大きな衝撃を与え、日本は欧米の技術や文化の輸入を積極的に推し進めていくことになった。そして、欧米の異質な技術や文化を受け入れていく中で、日本人は自分たち自身のあり方を再認識し、そこから新たな日本の姿が模索されていくことになったのである。こうした異質性の自覚は、単に外面的な科学技術や社会制度に限られるものではなかった。何よりも日本人は、初めてみずからの身体的なあり方の特殊性を自覚し、その中で、欧米諸国に伍するための、自分たちのあり方を考え始めたのである¹⁾。

ちょうどこの時期、欧米では進化論が提唱され、その影響を受けて、ゴールトン (Francis Galton, 1822-1911) が『遺伝的天才 (Hereditary Genius)』(1869年)を発売していた。ゴールトンは、その中で、イギリスの名門家系を調査し、天才的な能力が家系を通じて遺伝することを明らかにした。こうした遺伝に対する考え方は、進化論の流行を介して、日本人の間に広まっていく。進化論を日本に紹介したのは、1877 (明治10) 年に東京帝国大学に赴任したモース (E. S. Morse, 1838-1925) であったが、欧米に比べるとこの思想に対する宗教的抵抗感の薄い日本人は、これを難なく受け入れ、進化論思想は急速に普及していくことになる。そして、こうした新しい思想の普及の中で、日本人の身体や精神を作り変え、欧米諸国に対抗しうる国民を作り出そうとする運動が、次第に生まれてくることになるのである。

このような状況の中で、日本における最初の人種改良運動である「黄白雑婚論」が登場する。すなわち、1884（明治17）年に、福沢諭吉の弟子である高橋義雄が『日本人種改良論』を刊行し、その中で、日本人の改良のためには西洋人との雑婚が必要だと説いたのである²⁾。この主張は、加藤弘之との間に論争を引き起こしたが、それ以外には目立った反応はなかった。この時期の日本には、まだ日本人の改良という発想が、本格的には芽生えていなかったからだと思う。しかし、日本が、1894-5（明治27-8）年の日清戦争、および1904-5（明治37-8）年の日露戦争に勝利すると、海外では、黄色人種の勃興を脅威と見なして排斥しようとする「黄禍論（Yellow Peril）」という運動が沸き起こる。そして、その中で、日本人は再びみずからの特殊性を意識せざるをえなくなっていくのである³⁾。

そして、ちょうどこの時期に、先のゴールトンの提唱した優生学(Eugenics)が、日本で本格的に紹介されはじめたのであった。ゴールトンは、天才の遺伝に関する研究をもとに、1883年に、遺伝学の理論を応用して人間の質を改良する新しい学問、すなわち優生学を提唱していた⁴⁾。ゴールトンがこうした新しい学問を提唱した背景には、当時のイギリスにおける社会構造の変化（労働者階級の台頭とそれによる社会状況の悪化）があり、優生学は、こうした危機感を背景に登場してきたものであった。文明社会では劣悪な人々がより多くの子孫を残し、国民の質が低下していくという、いわゆる「逆淘汰」の思想は、同じような社会問題を抱える欧米諸国に受け入れられ、優生学は急速に普及していくことになる。日本においても事情は同様であり、社会問題の深刻化と相俟って、有力な社会改革の手段として、優生学の思想が次第に受け入れられるようになっていったのである。

本論文で取り上げる雑誌『人性』は、まさにこうした時期に登場した、日本で初めての本格的な優生学雑誌である。『人性』が創刊されたのは、1905（明治38）年4月であるが、それはまさに日露戦争のさなかであった。それ以来、この雑誌は月刊誌として刊行され続け、1918（大正7）年12月に第14巻第12号（通算164号）をもって休刊されるまで、14年間にわたり継続することになる。

そして、この1918年は、1914（大正3）年に始まった第一次世界大戦が終戦を迎えた年であったのである⁵⁾。この雑誌は、日露戦争から第一次世界大戦までの日本にとって重要な時期に、日本における優生学の議論をリードした重要な雑誌であるといえる。

この論文では、雑誌『人性』の内容を詳細に紹介するとともに、それがこの時代の日本における優生学の形成において果たした意味について、考察していくことにしたい⁶⁾。

2. 雑誌『人性』と優生学

2.1 『人性』刊行の経緯

雑誌『人性』は、『日本医学史』などの著作で有名な医学史家の富士川游（1865-1940）が主幹を務めた雑誌である⁷⁾。富士川は、1887（明治20）年に広島医学校を卒業し、医学雑誌の記者を経て、1891（明治24）年頃から日本医学史の研究を開始する。これが1904（明治37）年の『日本医学史』、そして1912（明治45）年の『日本疾病史』に結実し、東京帝国大学などから医学博士号を授与されることになる。彼が雑誌『人性』を刊行した1905（明治38）年は、『日本医学史』の刊行直後であり、彼の名声が一気に高まって来た時期であった。

この時期に彼がこうした啓蒙雑誌を刊行した背景には、彼のドイツ留学の経



『人性』創刊号の表紙

験がある。彼は、1898（明治31）年にドイツのイエーナ大学医学部に入学し、1900（明治33）年に学位を取得している。この時期のドイツは、進化論の本格的な影響が始まった時期であり、イエーナ大学には動物学者のヘッケル（Ernst H. Haeckel, 1834-1919）が在籍し、一元論的な進化思想を展開していた。こうした運動の直接的な影響がどこまであったのかは定かではないが、富士川が帰国後数年して『人性』を発刊した背景に、ドイツ留学での経験が存在していることは疑いようのないことである。

富士川は当初、単独でこの雑誌を主宰していたが、1909（明治42）年に「人性学会」を組織し、『人性』の刊行以外にも、常会や講演会等の活動を広げていった。富士川英郎によれば、当時の人性学会の役員は次のとおりであった⁸⁾。

幹事：高島平三郎，下田次郎，尼子四郎，森田正馬，永井潜，富士川游

評議員：石川貞吉，石原誠，花井卓藏，土肥慶藏，外山亀太郎，小川劍三郎，

小河滋次郎，乙竹岩造，横山雅男，田中茂穂，呉秀三，倉橋惣三，藤

浪鑑，藤井健治郎，藤井健次郎，二木謙三，佐多愛彦，榊保三郎，柴

田常恵

これらの人々の多くは、彼の郷里である広島県と同郷人や、医学史に関心を持つ学者たちなどであり、彼はさまざまな人脈を駆使して、こうした組織を作っていたようである。この人性学会はさまざまな講演会等を企画しているが、中でも、1909（明治42）年11月に開催した「ダルウィン記念講演会」は、『種の起源』刊行50年を記念した大規模なものであった。

2.2 『人性』の趣旨

さて、この雑誌には、毎号表紙に「本誌の主意」という次のような文章が掲載されている⁹⁾。

本誌は『人類の社会的及び精神的生活』に関する問題を解決するを以って、目的とする学術雑誌なり。今や洋の東西を問はず、人類の社会的及び精神的生活に関する研究の必要は嘖々と唱導せらるれども、其の自然發育学を

基礎とし、先づ生活の自然律を詳にしたる後、進むで歴史的に人類の社会的及び精神的歴史を攻究し、経済、政治、法律の關係と道德、哲学、美術、宗教の發達を詮索するものは歐洲に在りても近年獨逸國にて刊行せられたる『政治的人類学評論』を以て嚆矢とす。我邦にありては、固より未だ此般研究の機關たるべき専門雑誌あること無し。而かも時勢の進運は終に『人性』をして自から進むで此般の研究に従事せしむ。庶幾くは世の法律家。行政者。教育家。宗教家。医家。人類学者。衛生家。心理学者。其の他苟くも人性問題に就きて趣味を有する諸君子のために無二の好伴侶たるを得む。

この「主意」には、この雑誌の刊行目的が明確に表現されている。「人性」という言葉は、「人間の本性」を意味する、当時はよく使われた言葉である¹⁰⁾。彼はこうした人間の本性を、自然科学的な知見を基盤として多角的に解明し、その研究成果を広く知らしめて、啓蒙をしようとしたのであった。その際、表紙に「Der Mensch」というドイツ語が付されていることからわかるように、富士川が紹介しようとしたものは、ドイツの学会における動向が主であった。そのため、彼は当時影響力の強かったドイツの雑誌『政治的人類学評論』を模範としたのである¹¹⁾。

ところで、この主意に記されている具体的構想を、富士川は、『人性』創刊号の巻頭論文「人性」（1.1.1-10）において詳細に説明している。この論文は、『人性』の発刊意図を理解するうえで非常に重要であるので、詳しく紹介しておきたい。その中で富士川は、人性の研究が必要であるゆえんを次のように説明している。

人性の研究は西洋でも東洋でもおこなわれてきたものである。だが、古来より研究されてきたのは、単なる精神的方面の研究であり、身体の構造や人類の根原などについては研究対象とならなかったため、宗教的臆断と哲学的臆断に支配されてきた。しかし、近年、動物学、解剖学、生理学が人体に対する確実な知識を提供してから、人類の器質的發育、社会的發展、精神的發見を科学的

に研究することが可能となった。雑誌『人性』の役割は、このような方面における専門学者の業績を蒐集し、その趨勢を概括的に報道することにある。

このような構想のもと、彼は人性を解明する新たな探究の構図を次のように描き出す。彼によれば、まず必要とされるのは、人類を研究する学問、すなわち人類学である。近年になり動物学、解剖学、生理学が進歩し、自然科学的方法で「有機活体ノ自然史」を攻究する学問が誕生したのである。人類学は、人類とその生活関係を考察する自然科学であり、これによって、人類の根源、年齢、及びその自然界における地位を明らかにすることができる。この人類学は、富士川によれば、幾つかの種類に分けることができる。すなわち「身体的人類学 (Die physische Anthropologie)」、「人種人類学 (Die Rassen-Anthropologie)」、「精神的人類学 (Die psychologische Anthropologie)」、「歴史的人类学 (Die historische Anthropologie)」である。

以上の人類学と並ぶ基礎的な学問として、生物学が存在する。その攻究の内容は、主として、「種族における差異の原因」、「遺伝の働き」、「生存競争による淘汰の影響」などである。これら有機体に及ぼされる規則を、彼は「生活ノ自然律」と呼んでいる。

さて、以上の身体を対象とする基礎的分野と並び、精神を対象とする学問が存在し、それは「心理学 (Die Psychologie)」と呼ばれる。これは、実験と観察によって自然科学的に精神を探究するものであるが、各個種族の精神的差別を攻究する「人種心理学 (Die Rassen-Psychologie)」と、共同生活によって起る精神上的の機能および教育、即ち言語、神話、習俗を攻究する「国民心理学 (Völker-Psychologie)」または「社会心理学 (Soziale Psychologie)」が存在する。

これらの身体および精神に関する基礎的自然科学を基礎として、われわれは、人類の社会的・精神的歴史を究明すべきであるが、そのために必要なのが、「文化史 (Die Kulturgeschichte)」および広義の「歴史 (Die Geschichte)」(人類の生物学的歴史を攻究する人類学的自然史)であり、さらには法律学である。

以上のように、富士川は、人類の社会生活及び精神生活を科学的に攻究する

ための資料を提供するための雑誌として『人性』を位置づけようとするのであるが、さらに進んで、その役割は実際的な意味、すなわち、人類の発育と保全に必要な条件を究明し、現在の人類の社会生活と精神生活を向上させることを目指すことにあるとする。そのために富士川が取り上げようとするのが「衛生学 (Die Hygiene)」である。その際、われわれは、単に理学的、植物学的な面だけではなく、衛生における社会思想や人類学的思想にも着目せざるをえない。こうして富士川は、重要な分野として次のようなものを指摘する。まず、「社会衛生 (Die soziale Hygiene)」であり、酒毒、神経衰弱症の社会的原因と作用、精神病者の増加、少年の自殺と犯罪、国民病（結核等）、花柳病の撲滅、職業により起る疾病等を対象とする。こうした衛生思想が人類学的に応用されるとき、国民統計、死亡統計、体質病理等を対象とする「人類学的衛生学 (Die anthropologische Hygiene)」が存立する。さらに、人類の精神と身体の素質を改良し、人種の保存と発育のための最も適切な条件を攻究する分野である「人種衛生 (Rassenhygiene)」がある。彼によれば、この人種衛生は、最近の「社会政策 (Die Sozialpolitik)」とその主義を同じくするものであり、保険による勤労者保護、労働時間短縮、婦人および小児の保護などを通して、人種の保存を図るものである。また、これらと並び、我々は、教育、経済、法律、政治などの制度、すなわち「社会的淘汰機関」を軽視してはならない。とりわけ教育においては、少年を科学的視点から観察し、精神および身体の発達を促す手段を攻究する必要がある。また、社会改革の科学的方法として、犯罪者を社会学的及び倫理的に研究する「刑事人類学 (Die kriminal Anthropologie)」が必要である。

以上のように、『人性』を発刊するにあたっての富士川の構想は、当初から優生学的（=社会衛生的）発想に強く傾いたものであり、人体や人類に関わるあらゆる自然科学的知見を駆使することによって、人種の改善と向上を目指すものであったといえる。

なお、以上と同様の視点は、数年後の論説「人性の研究」(9.7.237-241)においても繰り返されている。そこで富士川は、人類の社会的な生活および精神的

生活を研究するために必要な学問を列举し、その研究内容を概説していくが、注目すべきは、この論説の最後に、彼が人類の精神のおよび身体的素質を改良することを目指した学問として「人種衛生学 (Rassenhygiene)」に言及し、この方面の研究として「ユーゼニック (優種論)」があると指摘している点である。富士川の関心が、次第に「人種衛生学」、そして「優生学」へと傾きを強めていったことをうかがわせる。

2.3 『人性』の構成

以上のような趣旨から、『人性』には、さまざまな種類の記事が掲載され、きわめて多様な話題が提供された。『人性』に掲載された記事の種類のうち、主なものは次のようなものであった。

(1) 論説

これは、主に日本人による数頁の論文であり、毎号1～3篇が掲載された。寄稿者は多様であり、富士川の周辺の関係者が多かったと推測されるが、3で紹介するような、富士川とは直接的な関係は薄かったと思われる優生学の論者たちも寄稿をしている。また、その内容も多岐にわたり、単に優生学 (人種衛生学) や、それに関わる基礎学だけでなく、文学や歴史、あるいは宗教に関わるものなど、非常に多彩であった。

(2) 総覧

主に外国人による論文の要約紹介であり、毎号2～3篇程度が掲載された。論説と比べると、その内容は限定されており、『人性』が目的とするさまざまな学問の内容が紹介されている。この雑誌の性格上、ドイツの雑誌からの要約が多い。(なお、第9巻7号より「鈔訳」という名称になっている。)

(3) 講義

日本人および外国人による各分野の基本的な内容の概説が主である。おそらく、啓蒙的な目的からこうした記事を設けたのであろうが、第4巻で姿を消している。

(4) 叢談

日本人および外国人による1ページ程度の短いエッセイである。「論説」同様、内容は多岐にわたる。

（5）彙報

海外および国内の注目論文の要約紹介である。毎号10篇前後の記事が掲載され、多い時には20篇を超える場合もあった。内容は、生物学、心理学、人類学、社会衛生、人種衛生、教育、哲学・宗教などの各分野にわたっており、海外の論文の紹介が大半であった。また、国内の主要雑誌からも、数多くの日本人の研究を紹介している。

（6）雑録、新著など

「雑録」には、各種学会の情報はじめとして、国内外での新著の紹介や、さまざまな研究成果などの情報が提供されている。特に注目すべき著作は、「新著」として、詳しい書評が掲載された。

2.4 海外の情報の提供

以上の記事の中でも、（1）「論説」と（5）「彙報」の果たした役割は大きかったと思われる。特に、『人性』の特徴は、国内外の注目すべき論考の抄録を掲載して広く情報提供をおこなった点にあり、その意味で、「彙報」において各種の専門分野における最新の情報が網羅的に紹介されたことの意味は非常に大きなものがあったといえるだろう。

「論説」については次章に譲ることにして、ここでは、「彙報」について概観しておくことにしよう。

「彙報」においては、優生学に関わる各分野の話題が数多く取り上げられており、当時活躍していた海外の優生学者たちの論考も多く取り上げられている。その話題は、低脳や精神薄弱などの問題、酒精（アルコール）問題や花柳病などの社会衛生、犯罪問題、人口問題や断種、産児制限など、当時噴出していた社会問題が数多く取り上げられている。

雑誌の性質上、多いのはドイツの優生学者たちである。ドイツの民族衛生運動に大きく貢献した代表的な学者で、『人性』において取り上げられているのは、

産婦人科医で社会衛生学者のM・ヒルシュ (Max Hirsch, 1832-1905) (7.1.13-14, 7.4.135-136, 7.5.171-2, 7.8.307, 8.6.229, 9.2.45-48, 9.7.261-2, 9.9.333-4, 13.1.27), 優生学の運動家で人種衛生学会を創設したA・プレッツ (Alfred Ploetz, 1860-1940) (6.6.225, 6.11.428-9), 社会衛生学の創設者A・グロートヤーン (Alfred Grotjahn, 1869-1931) (1.5.255-6, 2.1.48-51, 7.2.65, 8.9.330, 8-10-356), ドイツではじめて優生学を提唱した医師のW・シャルマイヤー (Wilhelm Schallmayer, 1874-1936) (8.4.154) などである。こうした記事を通して、ドイツの民族衛生学の思想は、いち早くその内容が伝えられるようになった。たとえば、「社会的衛生学トハ何ゾヤ」(1.5.255-6), 「社会衛生及変性論」(2.1.48-51) では、グロートヤーンの世界衛生学の構想が紹介されている。

こうしたドイツの学者の議論に比較すると、この雑誌の性格上、英米の優生学者の記事は少ないが、それでも、ゴルトンの後継者でロンドン大学ゴルトン記念優生学講座教授であったピアソン (Karl Pearson, 1857-1936) (2.1.45-6, 3.4.172-4, 3.9.419-20, 5.10.372-6) や、アメリカの生物学者で優生学記録局の創設に携わったダヴェンポート (Charles. B. Davenport, 1866-1944) (2.12.643-4) など、代表的な優生学者の紹介はなされている。

なお、優生学についての啓蒙的文章として、次のような記事が掲載されており、注目される。一つは、チャールズ・ダーウィンの子で、優生学協会 (Eugenics Society) 会長を務めたレオナルド・ダーウィン (Leonard Darwin, 1850-1943) による「「ユーゼニックス」の原理及び其必要に就て」という「総覧」記事である (8.11.398-402, 8.12.446-450)。これは、1912年の第1回国際優生学会議の際の講演の抄訳であり、いち早く紹介されている。もう一つは、「鈔訳」記事として掲載された、コスチンスケ (M. Koscinske) なる人物による「ユウゼニツク (人種改善学) ノ略史」(9.10.359-360, 9.11.397-400, 9.12.441-445) であり、ゴルトン以後の英米での優生運動の動きが詳細に紹介されている。

3. 日本人の優生学の論客たちの言説

次に、「論説」における日本人の論者たちの議論のうち、優生学に関わるも

のを取り上げていくことにしたい。

加藤弘之

加藤弘之（1836-1916）は、最初は「天賦人權論」主義者であったが、ダーウィン進化論の強い影響によってこの立場を放棄し、以後、優生学的な立場を強めていく。彼の優生学的発言は、『人性』発刊よりはるか以前から開始されており、すでに述べたように、1884（明治17）年頃に提唱された、日本人と白色人種の混血を推奨する、いわゆる「黄白雑婚論」に対して反対し、高橋義雄およびその師である福沢諭吉との間で論争を展開した¹²⁾。彼はその後も優生学的な発言をおこなっていく。雑誌『人性』に積極的に関わった形跡はないが、その紙上では、「彙報」（1.8.407-410, 2.6.334-335, 2.8.448-450, 2.12.646-647, 4.1.34-35, 6.8.312-313）や「雑録」（1.6.315, 2.6.338, 5.5.190, 5.12.472, 6.11.434, 7.6.230）において、盛んにその発言や活動が報告されている。彙報に掲載されている記事では、ヘッケルの思想を紹介した「新哲学」（2.6.334-335）のほか、「進化学的人生観」（2.8.448-450）、「道徳上ノ三淘汰」（6.8.312-313）などが注目される。さらにまた、「精神的及び社会的進化」（5.12.437-445）という論説を掲載しているが、これはダルウィン記念講演会の内容をまとめたものである。

丘浅次郎

丘浅次郎（1868-1944）は、ダーウィニズムの立場に立つ生物学者であり、『進化論講話』（1904年）の著者として著名である。石川千代松と並び、日本における進化論思想の普及において多大な影響力を持った人物である。丘は優生学（彼はこれを「民種改善学」と呼んでいた）に対して好意的であったが、熱心な運動家であったわけではなく、優生学に対する批判的な側面も持っていた。『人性』では、「彙報」（1.9.462-464, 3.1.38-39, 7.1.32, 13.10.383-384）と「雑録」（5.12.472, 6.10.395）において活動が報告されているほか、幾つかの「論説」が掲載されている。1910（明治43）年の「団体の生存競争」（6.2.39-45, 6.3.80-81）は、ダルウィン記念講演会での講演記録であるが、その中で丘は、

ダーウィン進化論における「生存競争」は、単に個体間の競争ではなく、集団（団体）の間の競争として理解されなければならないと説き、とりわけ人間における生存競争は、民族や国家という団体の間の生存競争であることを強調している。さらに、翌年には、「民主改善学の実際価値」(7.5.153-159)を掲載し、その中で優生学（民種改善学）の意義を批判的に論じている。彼によれば、遺伝学の進歩により、人間の質を人為的に向上させる可能性が見えてきた。しかし、現実の社会の制度下においては、急速に人間の質を改善することは不可能であり、せいぜい結婚の制限くらいしか実行できない。このように、丘は優生学の価値を認め、その可能性に期待を寄せながら、その具体的な実現可能性については、悲観的な立場を取っている。なお、「彙報」の記事の多くは進化論や遺伝学に関するものであるが、「自然淘汰と衛生」(1.9.462-464)は、優生学の問題に関するものとして注目される。

海野幸徳

海野幸徳(1879-1955)は、この時代を代表する優生学者の一人である。彼は、1910（明治43）年に代表作『日本人種改造論』を発表し、その中で、日本人の「社会的形質」（社会心）の改善の必要性を強く訴えている¹³⁾。海野は、日清・日露戦争後の状況の中で、日本人が、身体的形質において勝る白色人種との競争に勝つためには、国家に対する忠誠心を高め、団体としての力を増すことが急務だと考えていた。こうした主張を、彼は、アメリカに留学して社会福祉学に転向する1912（明治45・大正元）年まで続けるわけであるが、その最後の年に、彼は三本の論説を『人性』に寄稿している。まず、「人種改造学の急務」(8.1.14-18)において、海野は、人間の進化を、精神のみを発達させた特殊な進化として位置づける。そして、生物の進化は、外圍（外的環境）の改善と内部的な形質の進化によって生じるのであり、日本は、単に外圍を改善するだけでなく、形質の改造によって民族間の競争に勝利しなければならないと説く。続く「優良種族の衰頹を論ず」(8.5.166-172)では、ゴルトン、ピアソンらの統計学的手法を紹介し、無闇な人口増加が優秀階級を減少せしめ、逆に劣

悪者の増加を増長すると主張する。そして、次の「人口の量の問題に就て」（8.7.248-259）では、日本における人口問題を取り上げ、人口増加政策を批判して、むしろ、合理的な人口制限をおこない、優秀個体の増加を目指さなければならぬことが力説される。最初の論説の内容は、彼の主著である『日本人種改造論』の主張と重なるものであるが、その後の二つの論説では、その際には詳しく論じられてはいなかった人口問題に焦点が当てられており、注目される。

永井潜

永井潜（1876-1958）は、東京帝国大学医学部教授として、優生学に対して積極的な発言と運動を展開した人物である。彼が本格的に活躍を始めるのは、昭和に入ってからである。彼は1930（昭和5）年の日本民族衛生学会の設立に関わり、その理事長として、機関誌『民族衛生』の発行に尽力する。この組織の活動は、断種法の制定運動を経て、最終的には「国民優生法」へとつながっていった。

さて、1876（明治9）年生まれ永井は、『人性』創刊時27歳であったが、富士川の友人として盛んに寄稿している。ちょうど、1906（明治39）年に留学先のドイツから帰朝し、東京帝大の助教授として研究活動を開始した時期であった。最初の10年あまりは、彼の発言の中に優生学的なものはなく、寄稿された論説の内容も雑多なものであった¹⁴⁾。

ところが、1915（大正4）年に教授になると、彼は一転して優生学の論客となる。その最初期の作品が、この年に4回にわたり連載された論説「人種改善学の理論」（11.5.149-156, 11.6.189-194, 11.7.235-249, 11.9.309-315）である。そこで、彼は優生学を「人種改善学」と呼び、その理論化を試みている。まず、「一、人種改善学の必要」において彼は、具体的なデータを挙げながら、世界における人口の急激な増加と、その中での犯罪者や精神異常者などの増加率の高さを指摘する。そして、そうした状況の中での人種改善学の必要性を強調する。続く「二、人種改善学の理論」では、人種改善学の目的は、優秀な人間を

多く生み出し、不要な人間ができないようにすることであるとされ、「積極的人種改善学」と「消極的人種改善学」の二つが区別される。そして、園芸や畜産における品種改良の成果から、そうした改良を人間に対しても施すことで、人為的な進化が可能であると主張される。ところで、そうした変化に関わる要因として、内因と外因の二つがある。これまで、外因（外的な環境要因）だけが注目されてきたが、重要なのは実は内因であり、人間の内的な質の改善を引き起こさなければならないとされる。続く「三、実験遺伝学と人種改善学」では、そうした内的な改善を引き起こすための理論として、メンデルの遺伝の法則が詳述され、遺伝性の病気や奇形と、それに対する対処の方法が考察される。最後の「四、人種改善学の由来と実際」では、古代からの様々な優生学的な実践が紹介され、特に、ゴルトンやピアソンらによるイギリスでの社会的活動と、アメリカでの断種法の現状が紹介されている。以上の永井の論考は、日本における最初期の本格的な理論的発言のひとつとして、注目に値するものである。

富士川游

『人性』の主幹である富士川游は、優生学者ではない。しかし、すでに見たように、『人性』の発刊目的は、最終的には、優生学的な社会政策を視野に入れたものである。当然、富士川にも、優生学的な視線があったと考えるのが自然であろう。実際、彼自身、優生学と結びつくような内容の考察をおこなっている。たとえば、「頭蓋ト賢愚」(5.1.1-4, 5.2.43-46, 5.3.85-88, 5.4.122-124, 5.5.162-165)では、西洋における偉人たちの頭蓋の容量を比較し、頭蓋の形状と賢愚の差に相関関係があると主張している。また、「家族病ノ遺伝」(6.3.79-80, 6.8.295-296)においては、家族病における遺伝的な病気の発現の特徴が論じられている。また、「売笑問題」(10.7.195-197, 10.8.241-242, 10.9.282-283, 10.10.317-319)では、売笑をめぐる議論が歴史的に概観され、現代における「衛生的監視」の問題が論じられ、その不備が指摘される。「戦争の選択作用」(10.12.391-393)では、戦争が果たす生物学的な選択作用について論じられる。

そこで富士川は、戦争には生命選択（これには、強い優秀な団体を淘汰させる団体選択と、強者を滅亡させ弱者を生存させる個々選択がある）と生殖選択（強者の生殖を妨げることによって国民の変悪を招来する）という二つの選択作用があり、総じて見れば、戦争が弱者を淘汰し国民の発展のために有益であるという説は誤りであり、結局、国民の変悪を来たしてしまうものであると主張している。この考え方は、優生学の戦争反対論と同じ立場に立つものであるといえる。

自然科学者たち

この時期に活躍した優生学の立場に立つ自然科学者で、この雑誌に寄稿している者は少なくない。遺伝学者で、『人性』に名前が見られるのは、阿部文夫（1879-1945）と外山亀太郎（1867-1918）である。外山はこの雑誌に寄稿はしていないが、阿部は、「「ゼネチックス」ノ方法及ビ範囲」（7.6.198-202, 7.7.242-246）において、新興の「遺伝学」の内容を紹介する記事を執筆している。両者とも、その研究内容は、「彙報」においてしばしば取り上げられ、紹介されている（阿部：7.9.344-345, 8.5.231-323, 外山：5.7.268-269, 5.11.427-428, 6.5.193-194, 7.4.144-145）。特に優生学に関係する記事としては、阿部の「結婚ト遺伝」（8.5.231-323）、外山の「人類改良学ト生物改造学」（7.4.144-145）がある。

さらに、心理学者の元良勇次郎（1859-1912）は、論説「人格に就て」（5.7.237-243）を寄稿し、「彙報」において多数の紹介がなされている（2.5.281-282, 2.7.397-398, 3.4.182-183, 3.8.375-376, 3.9.422-423, 4.1.27-28, 4.5.193-194, 5.6.227-228, 5.11.429-430, 7.2.67-68, 8.3.110-112）。優生学関連の報告としては、「遺伝ト教育ニ就テ」（5.11.429-430）がある。

また、当時の東京帝国大学における生理学研究の中心人物であった大沢謙二（1852-1927）も、「人類に於ける遺伝研究法」（8.9.313-325）を寄稿し、「彙報」において紹介がなされている（1.1.48-49, 1.3.136-137, 1.4.191-194, 3.8.373-374, 6.1.34, 8.10.379-381）。優生学関連のものは、「体質改良ト社会政策」（1.1.48-49）、

「花柳病ト法律」(1.4.191-194), 「酒害予防ニ就テ」(3.8.373-374), 「体質改良ニ就テ」(6.1.34) などである。

その他, 注目すべき論客として, 通俗作家であり雑誌『性』を主催した澤田順次郎が, 二編の論説「離婚ノ弊害」(2.6.293-301) と「性の研究を以て一学科と為すの議」(2.9.475-481) を寄稿していることが注目される¹⁵⁾。

4. 雑誌『人性』の歴史的意味

以上, 雑誌『人性』の内容を紹介するとともに, この雑誌が, この時代の日本における優生学の形成において果たした意味について考察してきた。最後に, この雑誌がその後の本格的な日本優生学の形成において果たした役割について考察したい。

『人性』は, 優生学が日本において本格的に形成されていく黎明期に, 国内外の最新の情報を伝え, 議論の場を提供した。そして, そうした活動は, 『人性』が休刊してから数年して, 本格的な優生学運動に結実していくことになるのである。日本の優生学が, 一部の自然科学者を中心とした限定的な運動から広い社会運動へと転換していくのは, 後藤龍吉が1924(大正13)年に発刊した『ユーゼニックス』(のちに『優生学』), そして, 1926(大正15)年に池田林儀の主宰する日本優生運動協会により刊行された『優生運動』の二つの雑誌によるところが大きい¹⁶⁾。『人性』は, 大正から昭和初期にかけて盛んに刊行された, こうした優生運動雑誌の先駆的存在であり, そうした雑誌の登場を準備したと捉えることが可能であろう。

さらに, こうした民間から生じた社会運動は, やがて1930(昭和5)年創設の日本民族衛生学会と, その機関誌である『民族衛生』に連なっていく。日本民族衛生学会の理事長であった永井潜は, すでに見たように, ドイツ留学から東京帝大教授就任までの重要な時期に『人性』の発行に深く関わり, その中で優生学(人種改善学)の構想を固めていったのであった。

このように, 日本優生学の歴史的形成という側面から見たとき, 『人性』が持つ歴史的な意味は, 決して小さなものではなかったのである¹⁷⁾。

※本研究は、平成18年度関西大学学術研究助成基金（奨励研究）において、研究課題「日本優生学の形成過程をめぐる基礎的研究」として研究費を受け、その成果を公表するものである。

注

- 1) 詳しくは、木岡伸夫・鈴木貞美編著『技術と身体』、ミネルヴァ書房、2006年、第16章の拙論、「人種改良の論理—明治・大正期における優生学の展開—」を参照してほしい。
- 2) 鈴木善次、『日本の優生学』、三共出版、1983年、32-44頁を参照。高橋の人種改良論は、福沢諭吉の人種改良思想の影響を受けたものであった。
- 3) 日本では、この時期に、初めての本格的な優生学書『社会衛生 体質改良論』（1904年）が刊行される。木岡伸夫・鈴木貞美編著、前掲書、256-258頁を参照。
- 4) 鈴木善次、前掲書、16-22頁を参照。
- 5) 『人性』の休刊の主な理由は、戦争による紙価の高騰であった。大戦中の1917年、第13巻第9号に掲載された「謹告」では、大戦による物価高騰、特に紙価の高騰により本誌を刷新する旨が述べられ、次の第10号からの価格が16銭から25銭に値上げされている。しかし、その努力もむなしく、翌年の第14巻第12号に「休刊公告」が掲載され、この号をもって実質的な廃刊となった。
- 6) 以後、雑誌『人性』のテキストは、復刻版『人性』、全17巻、不二出版、2001～2002年、を使用する。引用情報は、巻、号、頁数の順に表記する。（たとえば、「9.7.237-241」は、第9巻第7号237-241頁の意である。）
- 7) この章での記述は、以下の資料を参考にしている。
松原洋子「富士川游と雑誌『人性』」、『『人性』解説・総目次・索引』、不二出版、2001年、5-10頁。
「富士川先生」刊行会、『富士川游先生』、1954年、非売品。
富士川英郎、『富士川游』、小澤書店、1990年。
- 8) 富士川英郎、前掲書、175-176頁。
- 9) この文章は、第9巻第7号からの表紙デザインの変更に伴い表紙から姿を消し、その後は裏表紙に掲載された。さらに第14巻第1号からは、目次頁に掲載されている。
- 10) 松原洋子、前掲論文、5頁を参照。
- 11) 『政治的人類学評論』（Politisch-anthropologische Revue）は、1902年にドイツで創刊された月刊誌で、内容構成や扱う分野において、『人性』がモデルとした雑誌である。また、『人性』の記事も、この雑誌に掲載されたものの紹介が多い。松原洋子、前掲論文、8頁を参照。
- 12) 鈴木善次、前掲書、32-44頁、藤野豊『日本ファシズムと優生思想』、かもがわ出版、1998年、382-385頁を参照。

- 13) この著作の詳しい内容については、木岡伸夫・鈴木貞美、前掲書、259-262頁を参照。
- 14) 「海ノ話」(1.7.317-327, 1.8.370-380), 「海ノ地理的研究」(2.4.177-183, 2.5.245-254), 「太古の日本住民につきて」(3.1.1-8, 3.2.57-66), 「人体美の一節」(3.8.339-347), 「色彩と人生」(5.2.37-42, 5.3.80-85, 5.4.117-121), 「原始人類の郷土」(6.5.159-163, 6.8.285-294), 「人体ニ於ケル正規的左右不対象(右利, 左利問題)」(7.8.273-286, 7.10.353-361, 7.12.446-456)
- 15) その他, 優生学に関わる論説のうち, 主なものは以下の通りである。
(精神病に関わるもの) 石川貞吉「精神低能ニ就テ」(1.6.265-273), 森田正馬「悖徳狂ニ就テ」(3.1.8-15), 「神経衰弱性精神病体質」(5.5.157-162, 5.6.202-209)
(自殺研究) 呉文聡「自殺論」(3.3.101-106, 3.4.151-158, 3.5.195-200, 3.6.243-249), 三田定則「自殺論」(9.8.269-279, 9.9.312-322, 9.10.354-358, 9.12.421-424, 10.2.32-34, 10.4.101-104)
(教育問題) 榊保三郎「優等児に就て」(6.8.279-285), 乙竹岩造「教育の効力」(8.10.349-355)
(遺伝問題) 呉秀三「血統と人妖」(6.11.399-409, 6.12.439-446), 緒方正清「同一物体の再来と人類の完成」(7.11.393-400, 7.12.433-441)
(社会問題) 岩田圭「貧民と教育」(8.12.425-433), 田結宗誠「貧民の疾病」(10.9.275-282), 寺田四郎「売淫問題」(9.11.383-390), アルフレード・ヘガール「支那, 独逸及ビ亜米利加ニ於ケル刑法学—低格者ト犯罪人ノ排斥論」(10.3.61-67, 10.4.104-110, 10.5.133-137, 10.6.165-170)
(人口問題) 横山雅男「我が帝国の人口増加力」(11.1.5-6), 二階堂保則「日本人口静態概観」(14.2.65-73), 木村久一「戦争と人口」(14.11.611-616)
- 16) 鈴木善次, 前掲書, 99-131頁, 藤野豊, 前掲書, 80-112頁を参照。
- 17) 『人性』が与えた影響は優生学だけではない。それは, 大正期における人間の身体や精神に関する多彩な雑誌の創刊につながっていったのである。雑誌『性』(大正9年創刊)の主宰者である澤田順次郎は, 『人性』への寄稿者であった。